

団塊のカタログ

ワシラ

トシタロー・クラフィティ

意表をついて昭和31年の流行特集である。

ケセラセラ

ヒッチコックの名作「知りすぎていた男」の中でドリス・デイが歌って大ヒットしたのがケ・セラ・セラで、これがそのまま流行語になった。(広辞苑にものっているゾ)

話は横道にそれるが、ワシラの世代に懐かしい落語家の一人に柳亭痴楽ちらくがいる。

林家三平・三遊亭歌奴(今の円歌)と並ぶ人気落語家の一人で、マクラの痴楽つづり方狂室がワシのお気に入りだった。

オレはお前を 愛うえお だから手紙を
書きくけこ 嫌なら刃物で 刺しすせそ
そして命を 絶ちつてと〜 気が付きゃ
財布はスッカラカン オケラ・ケラケラ
ケセラ・セラ 痴楽つづり方狂室より

本家のケセラセラはこんな歌詞である。

小さい頃 私の未来を ママに聞いたら
なるようになるわ ケセラセラよ!
大きくなって 恋をして 彼に聞いたら
なるようになるよ ケセラセラさ!
結婚して 子供に聞かれて 答えたの
なるようになるわ ケセラセラよ!

ワシら小学生にはペギー葉山の日本語の方がなじみで、こんなサビであった。

♪ケ・セラ・セラ なるようになる
先のことなど わからない

スペイン語「ケ・セラ・セラ=なるようになる」を明確に表現しているではないか。

この明るい歌詞とメロディーの曲が「ヒッチコック劇場」のとぼけた解説者のオッさんが監督した映画の主題歌だったことを知っていた小学生はほとんどいない。

ビデオで見たのはもっとズーッと後だが、この明るい曲とヒッチコックとはどうしても結びつけられなかったが、百聞は一見にしかず、映画では実に効果的に使われていた。

これが暗い曲だったら、スリラー効果はなかったろう。やはりヒッチコックはエライ。

よろめき・カックン

三島由起夫の話題作「美德のよろめき」がベストセラーになったことから、よろめきが流行語になった。本来の意味はヨタヨタ歩くさまなのだが、浮気とか不倫の意味もある。

昭和35年頃から、昼の1時すぎの時間帯にメロドラマが放送されたことがあった。

視聴者のほとんどはヒマな専業主婦、題材は不倫か浮気、これが昼下がりのメロドラマなので昼メロとかよろめきドラマなどといわれていたのである。むろん、今は死語。

由利徹ゆり とおるさんのギャグがカックン。

ヘッケルとジャッケルにやっつけられたブル公が頭にでっかいコブをこしらえてノビていて、頭の上には星がグルグル回っている、そんなシーンにつきもののカンマがある。

一般的にはトランペットに弱音器を近づけたり離したりしながら♪ホアン・ホア・ホア

・ホァン・ホァン・ホァン・ホァンとやるのだ。音階にすればド・ソ・#ファ・ソ・#ソ・ソ・シ・ドだが、これをチンチロリンの**カクン**と日本語に訳したのが由利さんで、前半のチンチロリンを省略してカクンが独立して流行語になった次第である。

これはワシら小学生もよく使った。

「あ～あ、カクンだよ」とか言って、笑いを取るのだ。それは良いのだが、哀れなのは頭にカツの付く名前のヤツだった。

勝夫・勝治とかの名前や、勝又・勝田などの名字は、本来ならカッちゃんなんて呼ばれる筈だが、大体がカクンになってしまう。

「おいカクン！」からかうにはちょうど良い。ちなみにカクンを学術的に表現すると**心理的衝撃**で、巨人の星の**ガーン**、谷啓の**ドヒャー**、イヤミの**シェー**も同類項。

グラマー・ストレス

もともとは美しさとか魅力^{バスト ヒップ}を意味する英語の**グラマー**だが、体格、特に胸と腰の部分の発達している女性の意味に使われる。

それまでの日本的美人といえ、なで肩と柳腰だ。その方が着物が似合う。

太い帯を腹に巻きつけなくちゃならないから、アンダーバストとウエストがほぼ同じ寸法（早い話がズン胴）が望ましく、これがイカリ肩にハト胸でウエストがしまってヒップが上を向いていては着物は似合わない。

また腰からくるぶしまでスッポリ覆ってくれるから、脚が短くてもしつかりバランスが取れる。日本女性の為にこそあるのがまさにキモノであり、そのキモノが似合うことこそ日本的グラマー（美しさとか魅力）だったのだが、マリリン・モンローに代表される西洋的グラマーがあらためて承認されたのである。

そうはいっても、身長^{身長}の絶対値とボディー

の凹凸のバランスはどうてい欧米の女性になわない。というわけで小柄でもグラマーな女性をトランジスタ・グラマー略してトラ・グラなる愛称も新たに登場した。

トランジスタがIC（Integrated Circuit・集積回路）にとって替られ、そのICも過去のものになってしまっている現状では、トラ・グラが死語になってしまったのは理解できるが、グラマーそのものもあまりいわれなくなっている。ワシ、好きだけど。

外部刺激による心身の機能変化が本来の意味だが、我が国では**精神的緊張**の意味に使われる**ストレス**、これもこの年から使われだしたがそんな日本語訳の方がよっぽどわかりづらい程すっかりおなじみ、一向に死語になる気配はない。たまる一方だ。

喋きのホッピング

ワシらが小学生の頃に異常に流行ったものが3つある。昭和35年（1960年）の**ダッコちゃん**と33年の**フラフープ**、そしてこの2つに先立つ第一弾が**ホッピング**（Hopping）だ。

Hopは飛ぶという意味だが、ホッピングを学術的日本語にすると**バネ付き鉄製一本足飛び遊具**になるが、もともとはアメリカの美容体操の用具なのだ。我が国ではこれを子供の遊び道具として売り出し、成功した。

その頃は意識しなかったが、これは戦後のニッポンの復興を象徴する革命的な事件であった。いつの時代、どこの国の、どんな状況下でも、子供たちはたくましく遊ぶ。

鬼ゴッコ・かくれんぼ・馬とびのように何もなくとも遊ぶし、ゴムボールひとつあれば野球、ナワー一本あればナワとびといった具合だ。他にも男のコならメンコ・ビー玉・ベーゴマ、女のコならお手玉とかオハジキなど、いずれも親の世代からの良くいえば伝統的な

悪くいえばダサい遊びばかりであったが、このホッピングの登場以降、子供の遊びはガラリと変化する。それまではメンコやベーゴマで遊んでる男のところに女のコがやってくることは滅多になかったし、男も女にまぎれての室内遊戯には抵抗があった。また小学生も高学年になると多少は男女の差を意識したりして、一緒に遊ぶ機会が少なかったものだ。

「女はすぐ泣くからやだよ」「男のコはランボーなんだから」最近では強いのが女のコで、すぐ泣くのは男のコの方らしいが、この頃はこうだったのだ。そこにアメリカからホッピングがいきなりやって来た。

それまでの我が国の伝統遊戯が男のコ用と女のコ用に別れていたのに比べ、カラーを除き男・女の別なく遊べる。これはその後のフラフープにもいえるし、**ダッコちゃん**に至っては真っ黒けのケで、完全に区別がない。

さてホッピング、基本のピョンピョン飛びをマスターしたらどこまで高く飛べるかに挑戦したくなる。「せーの!」「そーれ!」などと掛け声よろしく、飛び上がるのだ。

ワシのように風呂敷を首に巻いてマントに見立てる奴もいたと思うが、次に片手を離してやってみる。ただ跳ねるだけでは面白くないから走ってみるのだが、大体があせると前につんのめる。何人かで競走をすることももある。うまくなると階段の上り下りも出来るようになるが、これがまたよくすつ転ぶ。

何回連続できるか競ったりして、それなりにウケたが、しよせんは単純な遊びなので半年もたたない内にスタれてしまった。

当時すぐ飽きるからというのでホッピングを買ってもらえなかったワシ、親を拝み倒してやっとの思いで買ってもらったのがこのちよつと前で、流行っている時に乗り遅れるのはこの頃からの恒例である。

というわけで1ヵ月ほどで見向きもしなく

なり、親の「そら見たことか」の冷たい視線を背中に受けるのと、近所の路上からあのピョンピョンがすっきり姿を消してしまったのとはほぼ一致していた。もっともこの頃のホッピングは品質が悪く、地面に当たるゴムの部分が取れて使いものにならなくなってしまう頃でもあったが。そんなホッピングも本来の美容目的では爆発的な流行にはならなかっただろう。子供向けで正解。

嗚呼!スカイライン

昭和30年のトヨペット・クラウンに続き、あの**プリンス・スカイライン**が発売された。

その後33年にスバル360、34年にダットサン・ブルーバード、さらに35年にはトヨペット・コロナが相次いで発売され、ここらへんから本格的に乗用車が普及しだす。

その先駆けともいえるべき我が世代憧れのスカイライン、35年にはスカイライン・スポーツ、そして40年にはあの**スカイラインGT** (Grand Touring) が発表され、当時の若者に絶大な人気のあったプリンスであたが、その3ヵ月後には日産自動車にあっさり吸収合併されてしまった。「品質の日産と技術のプリンス」の合併ということで注目されたが、現実には日産の一ディーラーに成り下がっただけのこと、この合併は当時のスカGファンを大いにがっかりさせたものである。

ロングノーズ・ショートデッキのボディーに2リッター・6発・30,000^円。メインテナンス・フリーの封印エンジンが搭載されていたからこそスカGなのに、セドリックのL型エンジンに取って代わられたからだ。

そのプリンス、社名のイメージから当時の皇太子（今の天皇陛下）専用リムジンを製造していた栄光の時代があったことはコロッと忘れられている。宮内庁御用達だったのだ。

堀から電気へ

堀ごたつはどこに行ったんだろう。

4畳半なら真ん中に半畳を置き、6畳・8畳なら中央部分の1畳を半畳2つにしてポツカリ掘り下げる。この半畳分のタタミは取りはずし式になっていて、冬になるとひっぺがし、木製のやぐらを置き、正方形のこたつ専用布団をかぶせれば、堀ごたつが完成する。

何しろ我が国の住宅は絶望的に狭い。それゆえ多用途性が要求され、6畳ひと間がちゃぶ台を置けば食堂に、布団を敷けば寝室に変身する。広くも狭くも使用できるように、部屋そのものもフスマや障子で仕切っておいて必要に応じて取り外せるようになっている。

材質もほとんどが木と紙だから、どうしても機密性に欠ける。夏はそれが通風の良さとなるが、冬は逆に部屋全体を暖めても効果がない。そこでコタツの出番だ。

下半身をスッポリ暖めてくれる堀ゴタツは頭寒足熱の暖房原則にかなっているのみならず、日本の住宅事情に最適の暖房具なのだが見逃せない欠点も幾つかある。

炭が熱源なので強弱の調節がしにくく、排気ガスが出てしまう。そして最大の欠点は、火の元のすぐそばに燃えやすい布団が存在することである。その問題の熱源に電気を採用することにより、これらの欠点がほとんど解決された。それが**電気こたつ**だ。モーターものと熱ものは電化しやすい。熱モノの原点ともいべき電気コンロは戦前からあったので応用はたやすかったが、問題は安全性だ。

まず触ってもいいように断熱性を確保し、次に発熱体を上部に設置した。

炭を使わないから安全かつ手軽で、コンセントのある部屋ならどこにでも移動できる電気ならではの利点に加え、堀式でなくても使

用できる強みが加わった。

堀ごたつならではの足を伸せる利点はなくなつたが、家屋から縁の下が消えつつあったし、団地・マンションなどの集合住宅には堀モノが不向きであることも合わせ、電気こたつは急激に普及した。その後、赤外線や温風ヒーターが熱源に採用され、現在に至っているが、コタツの持ち味である部分方式暖房そのものがすでに時代遅れになっている。

スキーに行った時の小汚ない民宿の取り柄といえば、堀ごたつと野沢菜しかない。

そこで知り合った女のコの足に触ってトボける、そんな青春もあったのだ。

トイレの敵・湯沸器

ガス湯沸器ゆわかしきもこの年からだ。そんなに高価でなく、水道管とガス管につなぐだけの手軽さもあって、これもアツという間に家庭に普及した。なぜか白一色に統一されているボディーに赤いタネ火がゆらめいて、レバーカダイヤルを操作すると本火がポツとつく。

この本火、普通のカンロの炎とちがって、やたら細くて長い。水がお湯になる理屈は簡単で、水道管を細く長くかつグルグル巻きにして、真ん中を空けてここをガスの炎が暖めるのだ。ガスの噴き出し量はいったん設定したら変えられないので、お湯の温度の調節は水の出る量で調節する。細くて長い水道管を通して暖められる水の量が多ければ又ルく、少なければアツくなって出てくるのだ。

ガスの量でなく、水量で温度を調節するのもとかんがガス湯沸機の最大の欠点で、水道の元管は一か所だから、他の蛇口で使われればいやでも水量が減ってしまう。一度に大量の水を消費するのはなんといつても便所で、両者が同時に使用される時などはヒサんだ。火傷の原因が家族のクソだったなんてことも。